

# 親と同居する40・50代のシングルの実態と課題

—「40・50代の不安と備えに関する調査」より—

上席主任研究員 宮木 由貴子

## 目次

1. 親と同居する壮年未婚者の増加	40
2. 経済・就労状況と支出項目の見直し	41
3. 親の健康状態と介護不安	44
4. 生きがい	46
5. 生活満足度	47
6. 自由回答より	48
7. 今後の課題	49

## 要旨

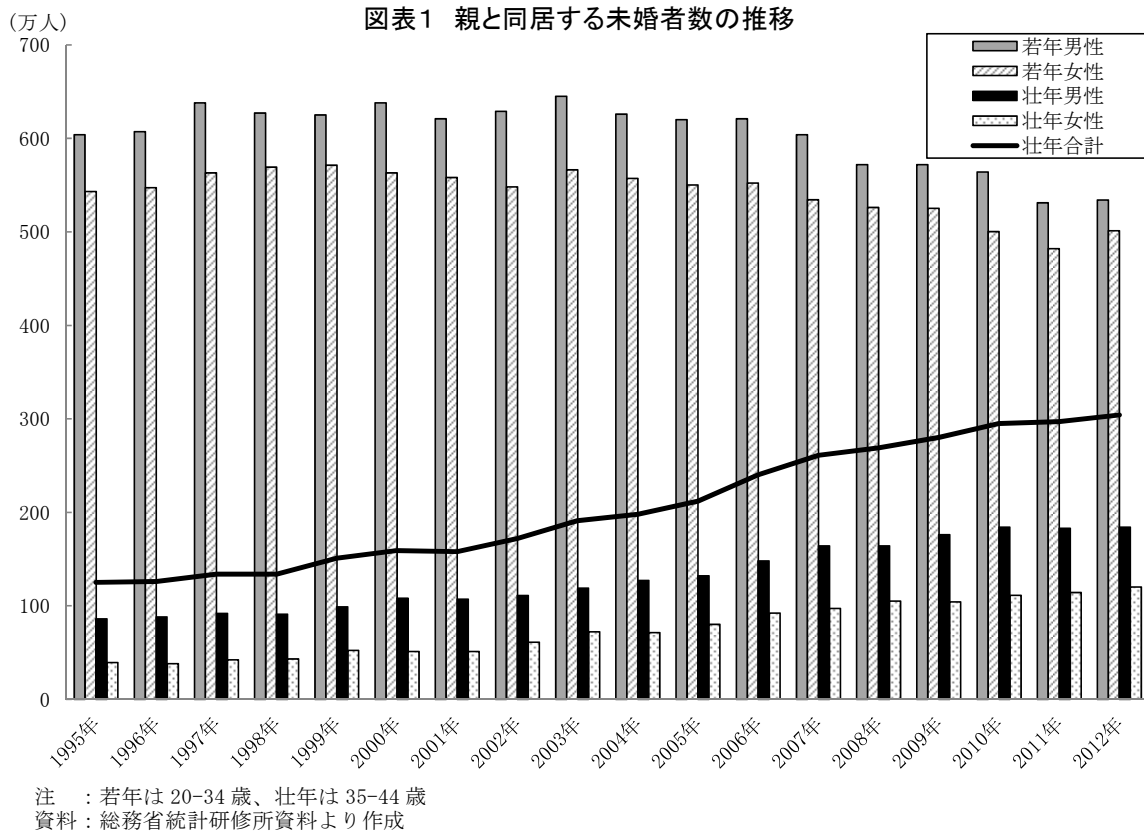
- ①近年、親と同居する若年未婚者が減少傾向にあるのに対し、親と同居の壮年未婚者が増加している。これについて、2013年に第一生命経済研究所が実施した「40・50代の不安と備えに関する調査」から、親と同居するシングル（配偶者がいない人）で別居子がない男女（以下、「自分・親世帯」と表記）に焦点をあてて分析をした。
- ②この属性の本人年収については、300万円未満の人が過半数を占めた。世帯の金融資産については「わからない」とする人が多く、回答した人では「金融資産なし」と「1千万以上」で二極化する傾向がみられた。
- ③現状で親が介護状態にある人は多くなかったが、親の介護や自分の老後の一人暮らしに対する不安は高い。生きがいについては、「特にない」とする割合が男女共に多く、平均回答項目数も少なかった。
- ④「家庭生活」「職業生活」「余暇・レジャー」「交流」「生活全体」の生活満足度は、すべてにおいて他の世帯より低い。特にこの世帯形態の男性無職者の満足度が低かった。
- ⑤今後さらに増加する親と同居の壮年未婚者については、将来的に一人暮らしとなる可能性を含め、社会的サポートとともに当事者が将来的な独居を見据えたライフデザインへの意識を高める必要がある。

キーワード：パラサイト・シングル、親の介護、社会的弱者

## 1. 親と同居する壮年未婚者の増加

総務省の資料によると、2006年以降、親と同居する若年未婚者が減少傾向にあるのに対し、近年は親と同居する壮年未婚者が増加している（図表1）。若年未婚者・壮年未婚者ともに、親と同居している未婚者は女性より男性が多い。この20年で急上昇した生涯未婚率をみても、男性が2割を超えて女性の倍を占める（図表省略）。

こうした層は、1999年頃に山田昌弘氏によって「パラサイト・シングル」と表現され、「学卒後もなお、親と同居し、基礎的生活条件を親に依存している未婚者」とされた。しかし、2002年頃からニートが急増し、引きこもりが問題視されるようになるなど、今日、親と同居している未婚者、特に壮年未婚者の事情が様々であることは想像に難くない。



親の高齢化が進み、介護の問題等が発生する時期を迎える壮年者において、親と同居するシングルの生活実態はどのようなものなのか。これについて、2013年に第一生命経済研究所が実施した「40・50代の不安と備えに関する調査」から、親と同居するシングルの男女に焦点をあてて分析をし、考察を行った。

調査概要は図表2・3のとおりである。

本稿において「自分・親世帯」とあるのは、親と同居するシングル（配偶者がいない人）で別居子がいない人（294人）を示す。年代分布は、40代前半が33.7%、40代後半が29.6%、50代前半が22.1%、50代後半が14.6%である（図表省略）。

なお、領域に応じて、全体値のほか、「自分・子世帯」（いわゆる片親世帯）、「単身世帯（別居子無）」「単身世帯（別居子有）」（別居子有の単身世帯）との比較を行っている。

図表2 調査概要

■調査対象：全国の40・50代男女3,376名
■調査方法：クロス・マーケティングのモニターを用いたインターネット調査
■調査時期：2013年11月

図表3 本稿の分析対象者の主な属性

(単位:人)

	男性	女性	合計
全体	1,645	1,731	3,376
自分・親世帯	185	109	294
自分・子世帯	21	100	121
単身(別居子無)	247	285	532
単身(別居子有)	65	51	116

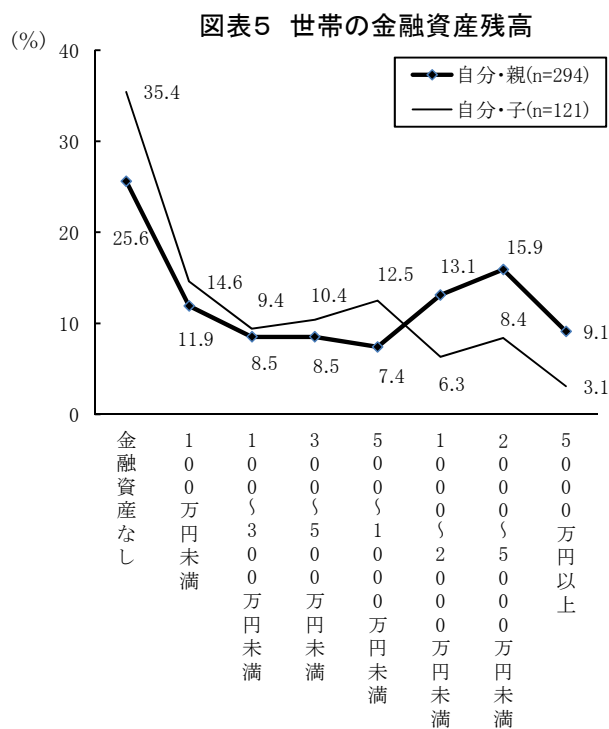
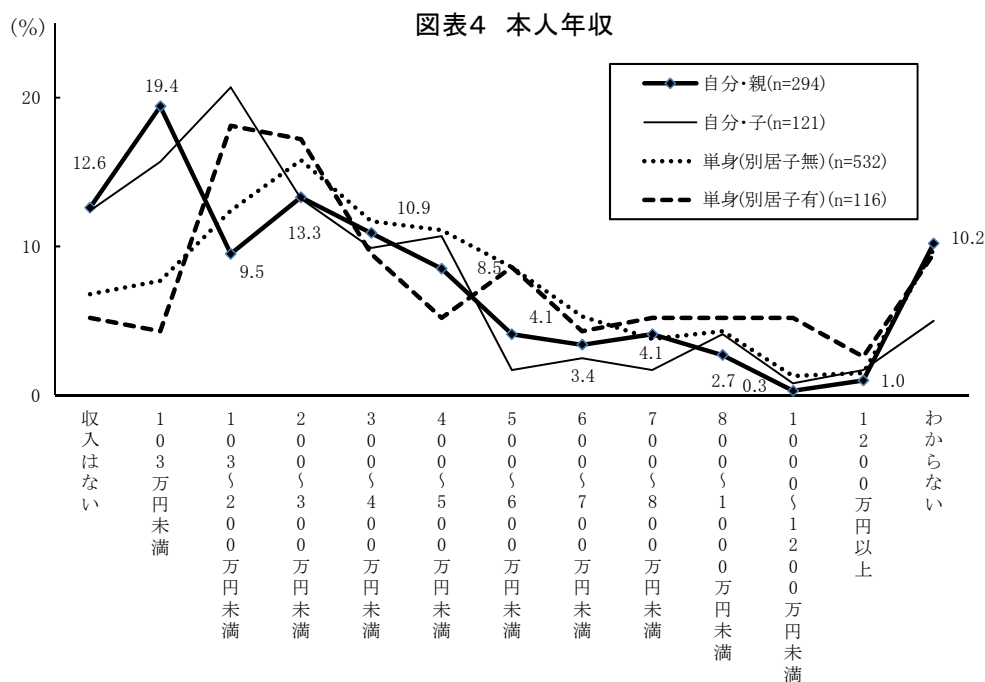
## 2. 経済・就労状況と支出項目の見直し

### (1) 経済状況

まず、経済状況について、自分・親世帯、自分・子世帯、単身世帯（別居子無）、単身世帯（別居子有）別に本人の年収をみる。自分・親世帯の年収は、「103万円未満」とする人が19.4%と約2割を占め、年収が300万円未満の合計で54.8%と過半数を占めた（図表4）。「収入はない」とする人は12.6%だった。自分・子世帯と単身世帯（別居子有・別居子無）の状況をみると、自分・子世帯、いわゆる父子世帯・母子世帯における年収は300万円未満とする人が62.0%を占めており、自分・親世帯より低い。厚生労働省の全国母子世帯等調査では、現在、父子世帯数は22万3,300世帯で、1983年に比べ33%の増加、母子世帯が2011年に推計約123万7,700世帯と1983年に比べ約1.7倍に増加するなど、自分・子世帯は自分・親世帯同様、近年増加している。単身世帯においては、別居子の有無にかかわらず、自分・親世帯、自分・子世帯より収入が高かった。

金融資産についてみると、自分・子世帯では「わからない」とする割合が20.7%であるのに対し、自分・親世帯では40.1%となっており、世帯の金融資産額を把握していない人が多かった（図表省略）。「わからない」とする人を除いて再集計すると、金融資産が1千万円以上とする人が自分・親世帯では38.1%を占め、自分・子世帯

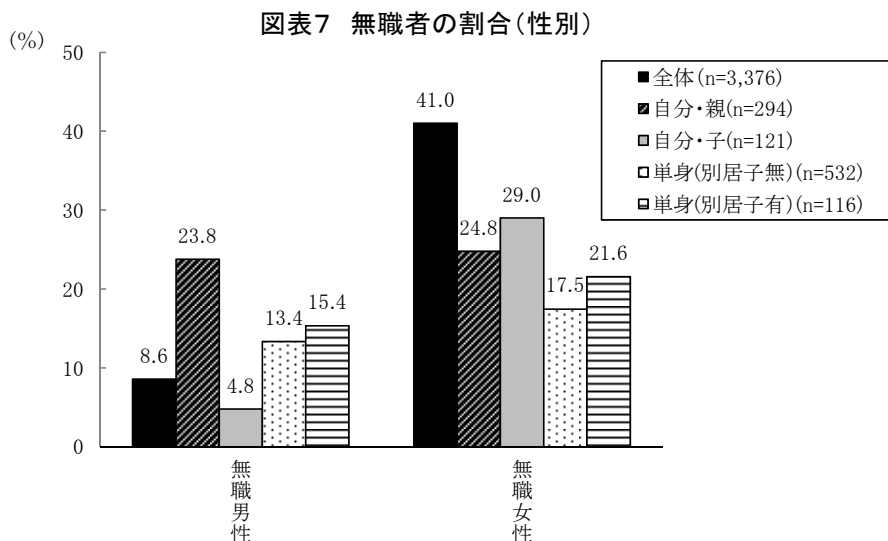
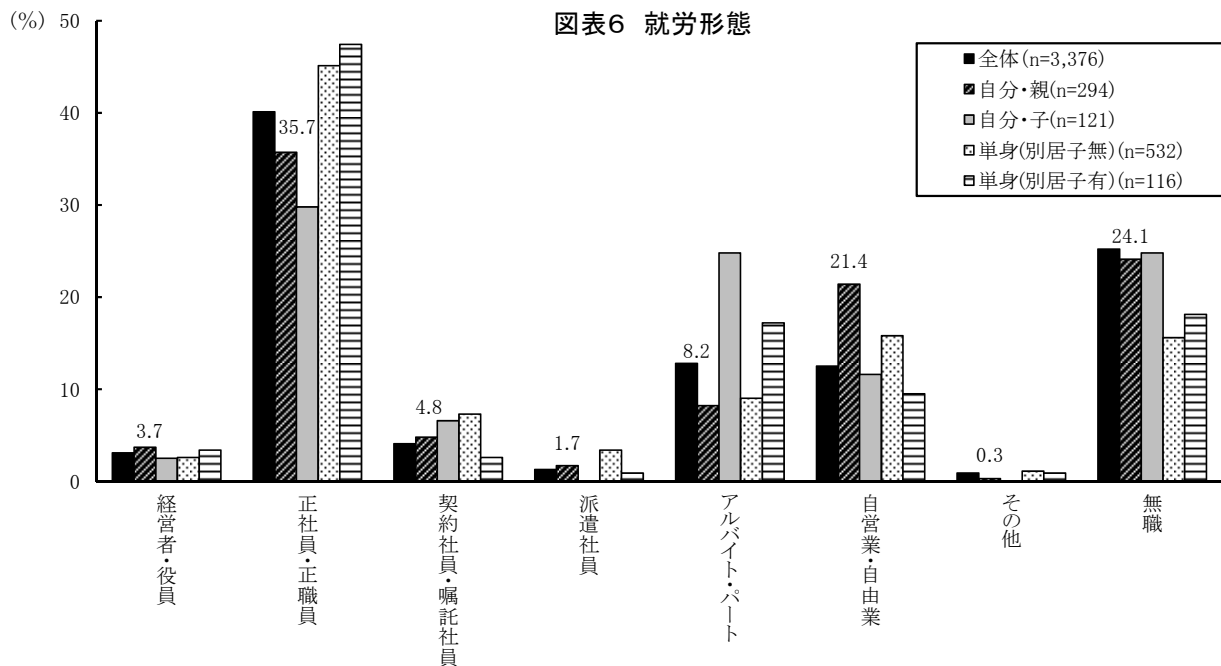
(17.8%)の倍以上に及ぶ（図表5）。「わからない」とする割合の高さや、1千万円以上の金融資産保有者の多さは、それらが同居している親の保有資産であるケースが多いことによるものと推察される。



## (2) 就労状況

次に就労状況についてみると、自分・親世帯では正社員割合が自分・子世帯に次いで低かった（図表6）。性別に比較すると、男性の無職者の占める割合が23.8%と、他の世帯に比べて高い（図表7）。自分・親世帯における就労状況と世帯の金融資産残

高との関係を見ると、「わからない」とする割合がそれぞれ44.8%、45.1%だった。「金融資産なし」とする割合は、「正社員・正職員」9.5%、「無職」25.4%と、無職が多い一方で、金融資産残高「1,000万円以上」とする割合は「正社員・正職員」25.7%、「無職」18.4%と、「金融資産なし」でみられるほどの差はなかった（図表省略）。

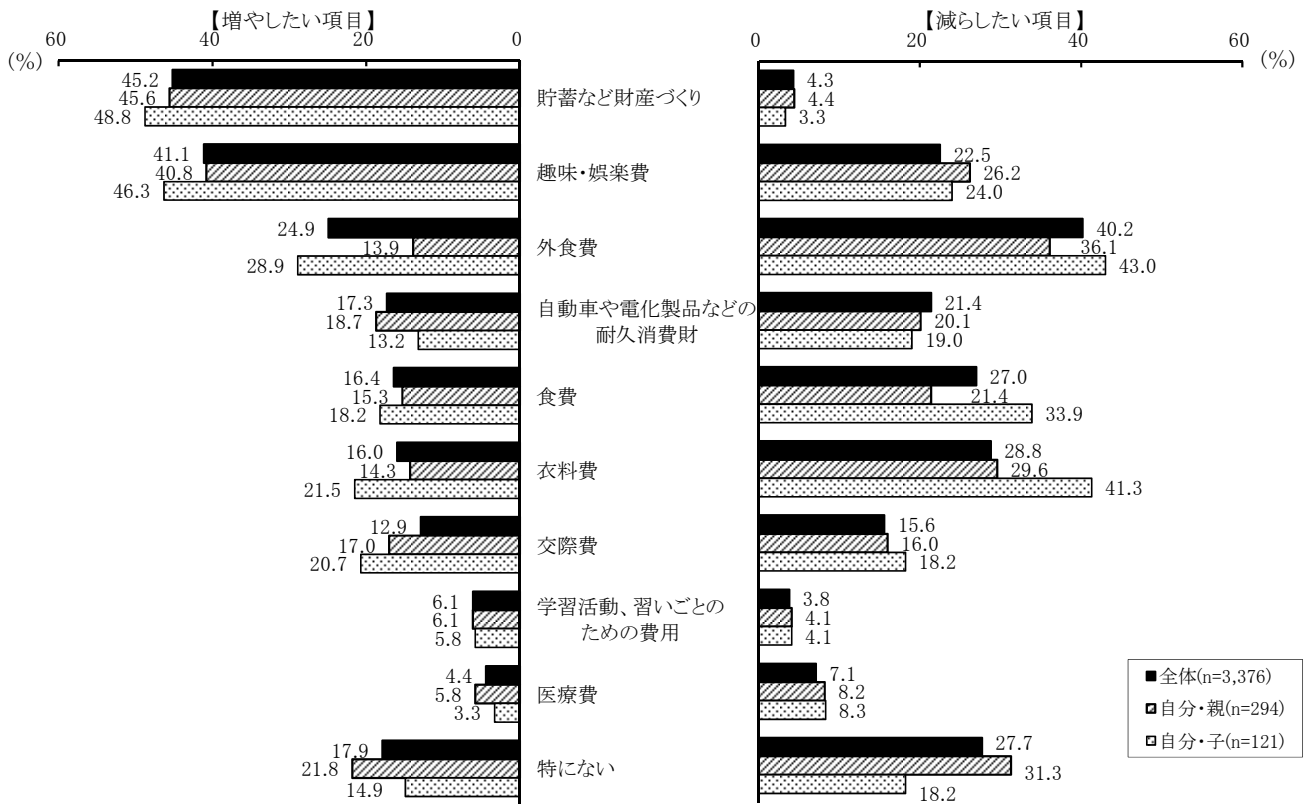


### (3) 支出項目の見直しに関する意向

続いて消費に対する意識についてみる。支出項目の見直しに関する意向について、「今後経済的ゆとりができたときに支出を増やしたい」項目と、「今後支出を減らそうと思っている」項目についてそれぞれたずねた。これについては、全体値と自分・親世帯、自分・子世帯の結果を比較した（図表8）。

まず、「特でない」とする割合は、「増やしたい項目」「減らしたい項目」とともに自分・親世帯で最も多かった。自分・子世帯は「増やしたい項目」「減らしたい項目」とともに具体的な回答項目が多く、支出項目の見直しに積極的であるといえる。自分・親世帯では特に食費・外食費についての意識がいずれも高くないことから、食事に関して親に依存するなど、自ら関与していないケースもあるものと推察される。

図表8 支出項目の見直しに関する意向



### 3. 親の健康状態と介護不安

#### (1) 親の健康状態

それでは、自分・親世帯における親の健康状況はどのようなものなのだろうか。これについてたずねたものを、両親ともに死去しているケースを除いた全体の数値と比較した。自分・親世帯においては、両親が共に「見守りや手助けを必要とすることはない」とする割合が44.9%と若干高いが、その差は全体(40.2%)と比較しても4ポイント程度だった(図表9)。父親が「要介護・要支援認定を受けている」とする人は5.1%、母親については11.2%となっていた。両親ともに「要介護・要支援認定を受けている」とする人は2.4%で、いずれも全体に比べると若干低い傾向がある。本調

査結果においては、親と同居する40・50代のシングルが、全体と比べて特に健康状態のよい親と暮らしているというわけでも、親が要介護状態にある割合が高いというわけでもなかった。

図表9 父親の健康状態と母親の健康状態の組み合わせ (単位:%)

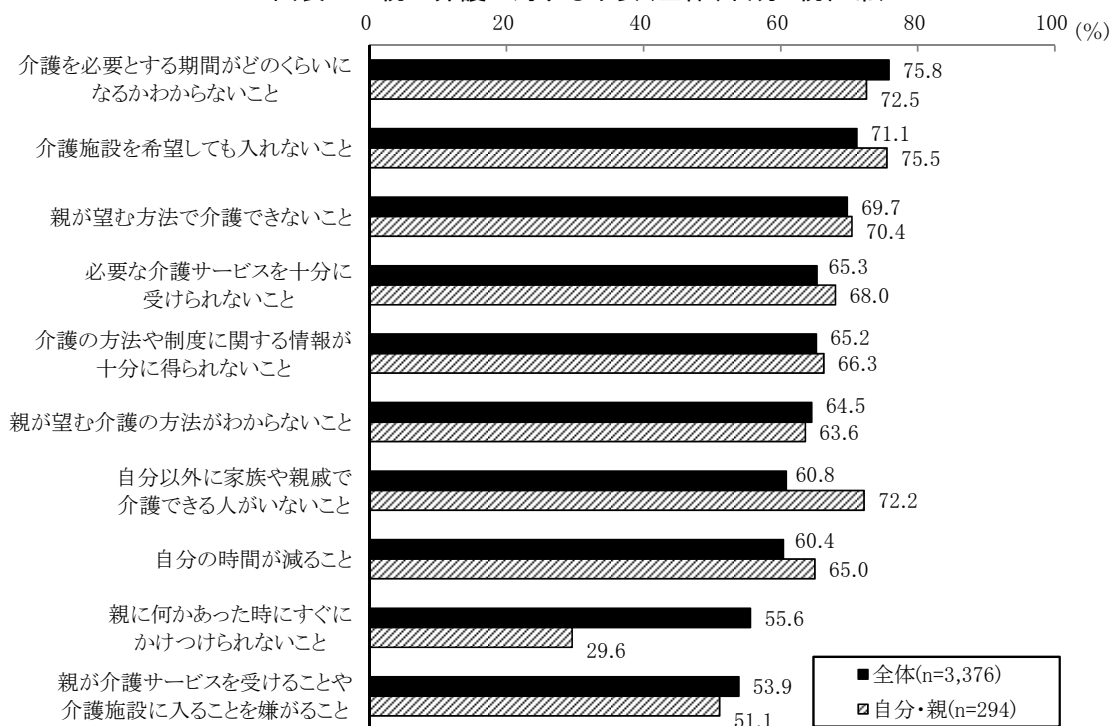
		母親の健康状態				合計
		死去	要介護・要支援認定を受けている	手助けや見守りを必要とすることがある	見守りや手助けを必要とすることはない	
父親の健康状態	死去	0.0 (0.0)	7.1 (7.3)	3.7 (5.7)	25.5 (24.0)	36.4 (37.0)
	要介護・要支援認定を受けている	0.3 (1.3)	2.4 (2.6)	0.0 (0.9)	2.4 (2.6)	5.1 (7.4)
	手助けや見守りを必要とすることがある	0.7 (1.1)	0.7 (0.4)	3.1 (2.3)	2.7 (2.7)	7.1 (6.5)
	見守りや手助けを必要とすることはない	4.1 (5.4)	1.0 (1.7)	1.4 (1.8)	44.9 (40.2)	51.4 (49.1)
	合計	5.1 (7.8)	11.2 (12.0)	8.2 (10.7)	75.5 (69.5)	100.0(100.0)

注:( )内は全体の数値。ただし、父母共に死去している人を除外した2,910名。

## (2)親の介護不安

一方、親の介護についての不安についてみると、親と同居する40・50代のシングルにおいては、「介護施設を希望しても入れないこと」(75.5%)、「介護を必要とする期間がどのくらいになるかわからないこと」(72.5%)に続いて、「自分以外に家族や親戚で介護できる人がいないこと」(72.2%)が続いた(図表10)。

図表10 親の介護に対する不安(全体、自分・親世帯)



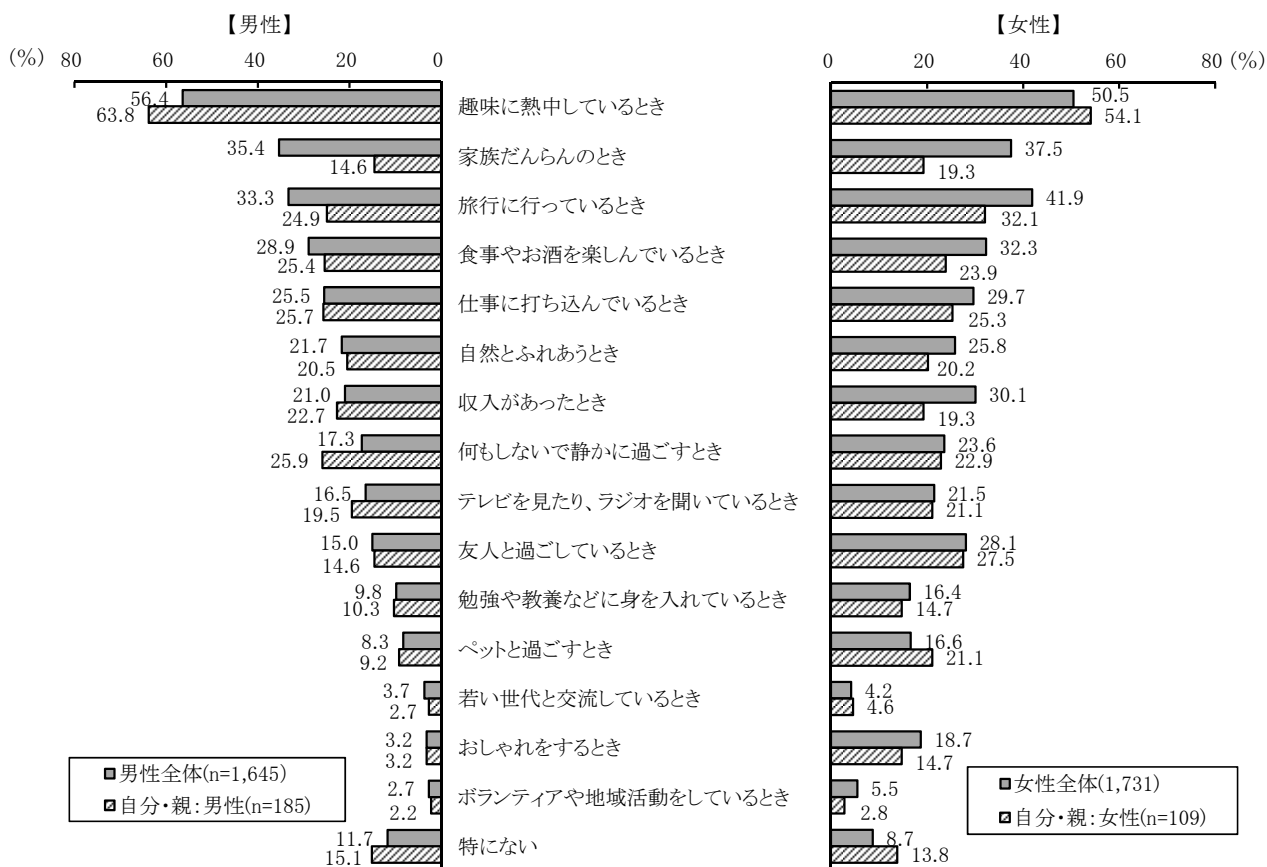
注:「非常に不安」と「やや不安」の合計

また、「自分の時間が減ること」についても、全体で 60.4%であるのに対して、自分・親世帯では 65.0%となるなど、親が介護状態になった際の自分の関与を意識している様子が見えてくる。一方で、「親に何かあった時にすぐにはかけつけられないこと」についての不安は、全体で 55.6%であるのに対して自分・親世帯では 29.6%となっており、不安感は低い。

#### 4. 生きがい

続いて生きがいについてみる。男女ともに自分・親世帯の人では「趣味に熱中しているとき」に生きがいを感じている割合が高く、それぞれ全体値を上回った(図表 11)。一方で、親と同居しているにもかかわらず、「家族だんらんするとき」については生きがいを感じている割合が全体値より大幅に低い。また、「旅行に行っているとき」「食事やお酒を楽しんでいるとき」などについても、全体値と比べてかなり低かった。さらに、生きがいが「特にない」とする人が全体値と比してやや多い。

図表 11 生きがい(全体、自分・親世帯)



注:「仕事に打ち込んでいるとき」は有職者のみ(男性全体n=1,503、自分・親:男性n=148、女性全体n=1,022、自分・親:女性n=87)



自分・親世帯のうち、男性の無職者の結果をみると、「趣味に熱中しているとき」が7割を超えて高かった（図表12）。また、「テレビを見たり、ラジオを聞いているとき」「勉強や教養に身を入れているとき」なども自分・親世帯全体の値を上回っていた。そのほかについては回答割合が低く、平均回答項目数も2.84と最低値だった。

図表12 生きがい(自分・親世帯、自分・子世帯、単身世帯)

(単位:%)

	男性				女性			
	自分・親(n=185)	単身			自分・親(n=109)	自分・子(n=100)	単身	
		うち無職(n=44)	別居子無(n=247)	別居子有(n=65)			別居子無(n=285)	別居子有(n=51)
趣味に熱中しているとき	63.8	70.5	58.3	56.9	54.1	49.0	55.1	49.0
家族だんらんするとき	14.6	15.9	5.3	21.5	19.3	47.0	11.6	13.7
旅行に行っているとき	24.9	13.6	25.5	27.7	32.1	41.0	39.6	45.1
食事やお酒を楽しんでいるとき	25.4	27.3	23.5	33.8	23.9	28.0	33.3	33.3
仕事に打ち込んでいるとき	21.1	-	23.5	20.0	19.3	19.0	32.3	35.3
自然とふれあうとき	20.5	18.2	18.6	24.6	20.2	25.0	26.0	29.4
収入があったとき	22.7	20.5	25.9	15.4	19.3	32.0	31.9	29.4
何もしないで静かに過ごすとき	25.9	22.7	20.6	13.8	22.9	26.0	24.9	21.6
テレビを見たり、ラジオを聞いているとき	19.5	25.0	16.2	20.0	21.1	13.0	24.6	21.6
友人と過ごしているとき	14.6	11.4	15.8	23.1	27.5	32.0	28.4	33.3
勉強や教養などに身を入れているとき	10.3	15.9	14.2	7.7	14.7	17.0	17.5	23.5
ペットと過ごすとき	9.2	13.6	4.9	6.2	21.1	16.0	18.2	7.8
若い世代と交流しているとき	2.7	2.3	4.9	3.1	4.6	4.0	2.8	5.9
おしゃれをするとき	3.2	0.0	2.8	1.5	14.7	15.0	18.6	35.3
ボランティアや地域活動をしているとき	2.2	0.0	1.6	3.1	2.8	4.0	6.3	3.9
特にない	15.1	15.9	16.6	12.3	13.8	9.0	12.6	7.8
平均回答項目数	3.33	2.84	3.16	3.32	3.74	4.09	4.28	4.23

注:男性の「自分・子世帯」、女性の「自分・親世帯」の無職については、サンプル数が少ないので省略

## 5. 生活満足度

こうした状況下で、自分・親世帯の人の生活満足度はどのようなものなのだろうか。「家庭生活」「職業生活」「余暇・レジャー」「友人・知人やサークル・団体との交流」「生活全体」の5つの領域の満足度について、「満足している」に5点、「どちらかといえば満足している」に4点、「どちらともいえない」に3点、「どちらかといえば不満である」に2点、「不満である」に1点を付与し、平均値を比較した（図表13）。

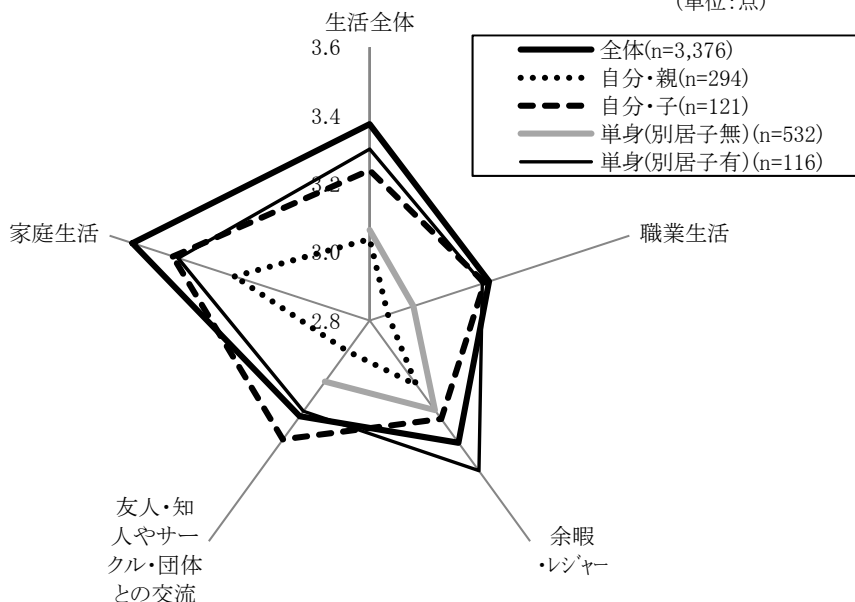
この結果、自分・親世帯は「家庭生活」「職業生活」「余暇・レジャー」「友人・知人やサークル・団体との交流」「生活全体」のいずれも他の世帯に比べて低い値を示しており、全体的な満足度が非常に低いことが明らかとなった。

自分・親世帯のうち無職者のみの平均値をみると、いずれの満足度も自分・親世帯全体と比べて満足度がさらに低かった。分析対象者が少なくなるので参考値としてとどめるが、性別にみると自分・親世帯の無職男性の平均値はいずれも極めて低い。単身無職の男性と比較すると、「家庭生活」と「余暇・レジャー」についてはほぼ同等に

低い満足度だったが、「友人・知人やサークル・団体との交流」「生活全体」については自分・親世帯の無職男性の満足度が低い。

図表 13 生活満足度

(単位:点)



		家庭生活	職業生活	余暇・レジャー	友人・知人やサークル・団体との交流	生活全体
全体(n=3,376)		3.53	3.17	3.24	3.15	3.37
うち無職者全体(n=851)		3.53	-	3.25	3.20	3.41
無職者男性(n=142)		2.89	-	2.69	2.67	2.75
無職者女性(n=709)		3.66	-	3.37	3.31	3.54
自分・親	自分・親世帯全体(n=294)	3.21	<b>2.86</b>	3.03	2.91	3.04
	うち無職者全体(n=72)	3.01	-	2.82	2.65	2.76
	無職者男性(n=44)	<b>2.61</b>	-	2.50	<b>2.43</b>	<b>2.36</b>
	無職者女性(n=28)	3.64	-	3.32	3.00	3.39
自分・子(n=121)		3.40	3.15	3.16	3.23	3.24
単身(別居子無)(n=532)		-	2.94	3.13	3.02	3.06
単身(別居子有)(n=116)		3.39	3.15	3.34	3.13	3.30
単身の無職者:男性(n=43)		2.63	-	<b>2.49</b>	2.67	2.56

注:各領域の最低値を太字表示。職業生活については有職者のみの結果。

## 6. 自由回答より

さらに、自分・親世帯の実態をより詳細にみるために、「やっておいてよかったこと・やっておけばよかったこと」についての自由回答結果についても概観した。これらの点はいずれも将来の不安を反映したものであると解釈できる。なお、自分・親世帯の無職者の自由回答は、全体的にみて「特になし」との回答が多かった。

### （１）生活資金と自分の健康

自分・親世帯では生活資金確保への関心が高く、貯蓄や資金運用、保険加入に対して「やっておいてよかった」「やっておけばよかった」との記述が多く、関心が高かった。また、自分の健康に対する関心が高い人も多く、自分のいざというときの治療費やケアをしてもらう人に関する不安が高いようだった。このため、特に保険に関しては自分の医療保険への関心がみられた。さらに、健康診断や歯のメンテナンス、運動といった自助努力に関する意見も散見された。

### （２）親の介護

また、親の介護についての記述も多かった。今回の回答者において、現状では親が介護状態にある人は少ないとの結果を得たが、親の高齢化に伴って介護への不安と備えの意識が高まるようである。同居している分、その責任と負担を自分が負うことになるとの意識を持つ人も少なくない。こうした背景から、介護知識の習得や関連情報収集、さらには介護資格や福祉資格の取得に対して、「やっておいてよかった」もしくは「やっておけばよかった」とする意見が多く、関心の高さがうかがえた。また、施設利用のための資金確保や家の改築に関する記述も多々みられた。

### （３）ネットワーク

さらに、人脈の形成と維持に関する回答も多かった。これについては旧交を温めたり、地域活動やサークル活動を通じて新たなネットワークを形成するなどの行動をしているとの回答がみられると共に、こうした行動を「やっておけばよかった」とする回答が多々みられた。

## 7. 今後の課題

今回の結果から、自分・親世帯の生活満足度の低さと男性の無職率の高さが確認された。特に自分・親世帯の男性無職の生活満足度は低く、生きがいの多様性も低いなど、全体値と比べてかなりの乖離があることがわかった。

また、今回の調査結果から40・50代の自分・親世帯で特に介護負担が大きいとの現状は認められなかったが、今後、親の介護に従事するケースは決して少なくないと思われる。実際、親の介護への不安や備えの必要性を感じており、親の介護や一人暮らしは将来的に訪れるものとして自分・親世帯のシングルに意識されている。親世帯と子世帯が別居しているケースと異なり、実子が親と同居し、将来的に親の介護を担うことは、親にとって安心できる側面があるだろう。ただし、総務省のデータにもあるように、今日親と同居する未婚者の多くは男性で、35歳以上の占める割合が増えて

いる。さらに今回の調査では、親と同居する40・50代の未婚男性には多数の無職者がいる。こうした人たちが、親の死後、親の年金収入等が途絶えた後に収入がないまま独居者となる可能性が懸念される。実際、本調査では、「自分が老後に1人暮らしをすること」について不安を持っている人（「非常に不安」と「やや不安」の合計）は全体値で56.6%であるのに対し、自分・親世帯の人では70.5%にのぼっている（図表省略）。「非常に不安」と回答した人だけでも3割近くを占めており、「単身（別居子無）」者と比べてもかなり不安が高いことがわかっている。

また金銭面だけでなく、ネットワークの課題もある。親と同居することで親の地縁を受け継ぐ人もいると思われるが、親の没後にそうした地縁を自らのものとして活用できるかは定かでない。さらに親の死の前に親の介護をすることになれば、学生時代や趣味活動の友人等、自らのネットワークが疎遠になったり途絶えるケースも少なくないだろう。

本稿では、随所で自分・子世帯との比較も行ったが、特にシングルマザーについては、今日、養育費支援や就業支援、自立支援、補助手当といった優遇措置や社会的支援がある。さらに、子育ては子どもの年齢に応じた今後の見通し予測が立てやすいのに対し介護は見通しが立ちにくく、同居家族が介護する場合、介護従事者の人生設計が難しくならざるをえない。こうした側面もあってか、経済的には自分・親世帯より厳しい状況にある自分・子世帯の生活満足度は、自分・親世帯よりずっと高いと考えられる。「自分が老後に1人暮らしをすること」を「不安である」とする人も、自分・子世帯においては半数に満たない（「非常に不安」とする人はわずか6.6%）。

生涯未婚率は今後さらに高まると予測されていることから、壮年未婚者の増加傾向も続くと考えられる。壮年未婚者は将来的に独居となる可能性が高く、無職であることは生活困窮のリスクを高めることとなる。来年度より、生活保護の前段階としてのセーフティネットとして「生活困窮者自立支援制度」が開始され、早期自立を促すための各種支援が行われる。こうした制度と併せて、親と同居する壮年未婚者自身が将来的な独居を見据えたライフデザインへの意識を高める必要がある。そのために、まずはこうした世帯の実態を明らかにし、具体的な問題点を浮き彫りにするとともに、必要な情報を提供すべく社会に向けた積極的な情報発信が必要であると考えられる。

（研究開発室 みやき ゆきこ）

#### 【参考文献】

- ・山田昌弘, 1999, 「パラサイト・シングルの時代」ちくま新書。